

KO NAKAJIMA ビデオ作品とインスタレーション作品の解説

私は何からアートを発想するのか？、それは5つの元素「木・火・土・金・水」を基本に据えて発想します。何かを考えたり、創造したり、システムや概念を作る上げたりする時、自然界の植物や動物、貝や波、波紋、霧などの発生や生成のメカニズムである構造様式の「アルゴリズム」からも制作の概念を取り入れます。外観の形の形成と内部構造の生成メカニズム、そしてその生成プロセスの計算された構造の美しさも制作のヒントとなります。そしてそのあらゆる形の構造が地球環境のメカニズムと深く関連していることに気づくのです。そこで私は地球上の5つの元素「木・火・石・水」の生成システムに注目したのです。そしてこの5つの元素を基本の軸に据え、制作を1970年代から開始したのです。

まず「火」の構造でこの地上から人間を含めた自然を観察しましょう。太陽による日の光りはなくてはならない存在です。そして雷、野火、山火事、火山の爆発や溶岩などの熱と光りを発するものをすべてここでは自然の「火の世界」と言います。この自然の火の反対に人工の火が光の世界があります。人間が作り出す「火の世界」です。自然が与えた火の世界を「陽の火」とすれば、人工の火は「陰の火」と言えます。人間はこの陰陽の火の世界の事実を認識して、人間と「火の世界」を見つめなければなりません。つまり火とは何か？、人工と自然の火の世界であるエネルギーの問題をあらためて見つめ直す必要があるのです。

そして次は「土の世界」から我々を含めた全生物を見つめることが求められています。次ぎに「金の世界」では、金は、金属が作り出している「道具」の世界です。道具とは「モノの世界」です。この「モノの世界」から全動物を含めたモノと動物、モノと人間のあり方、モノの存在のあり方を見なおすなければならないのです。そしてさらに「木の世界」から見た人間と木のあり方。木のシステムと人間のシステムの相違点を見つめなおすことが重要なのです。最後に「水の世界」、水の世界から人間を含めた水と人間、水と環境との関連について「水と同じレベル」で思考する必要があるのです。

以上、地球の元素である「木火土金水」の5元素の「思考」で考える事が東洋的思考法の根源なのです。創造とは元素を通して地球全体を考えることです。地球環境と言う構造も含めた創造が必要です。それには5元素から発想し、5元素から出発する必要があります。私の作品制作の根本はつねに「五つの元素」から全宇宙を見つめなおすことからスタートしています。そして、つねに作品をそこから再構築することが「作品の思想」です。ビデオ作品もインスタレーションもこれらの五元素に乗っ取り構築した作品群です。木から見たこの私達の世界、つまり木の構造から見たこの私し達の環境世界。また木の持っている木自体の構造的世界觀、木の生成のアルゴリズムから見た私達の世界、我々心の構造のアルゴリズムと木のアルゴリズムの比較した世界。また同じように土や石から見た我々の

世界、火・土・石・自身の独自の世界から見た世界観、各元素のアルゴリズムの世界。そして、水の構造で見たこの我々の世界と人間の構造、水自身の構造とアルゴリズム。アート表現と心のアルゴリズムの関係、創造とフラクタルの関係などです。

物理学や科学、計測学やコンピュータの発達によって地球上の動植物の生成のアルゴリズムが少しずつ姿を現し始めている今日、芸術家も科学者や物理学者と組んで元素から放射してモノを見ることによって創造力を深め、地球環境のメカニズムをもつと知ることが大切なのです。そして、もう一度「人間を含めた環境とアート」の関係を見つめ直す必要があるのです。新しいアートの再出発は全地球の環境とアートからスタートします。

まずは5元素から創造を開始すべきです。私の作品概念は上記の概念にそつて構築されています、「土のビデオ」である(Mt·Fujii)は構造より引き合う力(引力)を中心に制作したものです。「石のビデオ」である(DOLMN)は止まっている石の構造が火によって動き出し、変化することにヒントをえて制作したものです。「火のビデオ」である(RANGTOTO)は火が燃える構造に忠実にしたがって制作したものである。また制作地もその作品の環境と構造に合わせて選んでいます。土の作品は日本で、石はフランスで、火はニュージランドで製作したものです。水は中国で、木はカナダで製作かる予定です。

では、次ぎに創造構築の根源である5つ元素の意味について語ります。

土の作品の意味、「土の存在と構造は哲学者に等しい意味を持つています」土は父なる大地、大地の内部は限りなく暗く、地の底は地鳴り満ち、そして、土の温もりはすべての植物を優しくします。巨大な山は陰の土であり、巨大でシンボル的存在い満ち、その風貌は父に似て偉大です。その光景は光り冴え、永遠に記憶の彼方に残っています。「土」は山の土と平地の土に分かれています。陽の土と陰の土に区別されます。しかしこの陰陽の土は互いに引き合っている存在です。陰陽の引力、土の持つ磁場です。そして地下のマグマと山の土、平地の土、この3つの土が引き合う関係で地球上の土の構造は関係をもつていています。この3つの関係が「植物を育てる」重要な情報源なのです。以上が「土の概念」でした。この概念で制作した作品が「土のビデオとインスタレーション」なのです。

石のビデオの意味、東洋では「石は無と言わされてきました」無と石は同じ次元で、同じ存在です。意識の無に対して、石と無の心は同じだと問いかける訳けです。禅独特の問いかけの世界観です。心の意識の無に対して石を設定するところが禅らしい一つの「パラドックス」だとも言えます。無の心を「石」に移動させて自分の心を見るわけです。しかし心は常に動いているのが普通です。動く心の構造は、無の心の構造と同質であり、「動」と「静」は同次元と禅は解いています。そこで「静」と「動」の心の構造を知らないといけません。静とは、静かに静止して雲のように「ゆらいでいる心」です。原子核運動の「ゆらぎ」運動に似ています。このゆらぎの静に対して、「動の心」である心臓の鼓動のよう

なりズミカルな心の動きがあります。この静と動の両者の心の構造をバランス良くシフトして、一つに統一することが石の創造力（石心）であり、石の意味かも知るのです。

しかし石のことを見ると中国では「金」といい。石は金属を生み出すと言われ、石が変化して金になり道具になると言われています。今日のこの金属が道具に変身している時代を、ましくしく変化した石の文明が今日のテクノロジーによるハイテク文化を築り上げているのです。。石の変化がハイテク文化の形成なのです。現代文明はまさしく「石の変質した文明」であり。石が別の形に変身した文明なのです。石の構造が最も変身した時代が現代です。そして現代文明の構造は生成しているのが石なのです。

石の本質は一つの構造から次ぎの構造への変化を重視します。変化がコンセプトです。石が火でその構造を変えるように。石と火の関係は「火」で変化します。火の熱量で金（金属）が誕生するのです。石は火によって精錬され金になり構造を変え、金も火によって構造を変えます。火で構造を変えるのが石であり金です。以上が石の概念であり、石の構造様式です。この構造を取り入れ制作しているのが石の作品であり、石のインスタレーションなのです。

木のビデオ「木、それはただひたすら構造的でフラクタルのシステム世界」、木の構造は実に単純です。規則的で構造的な世界です。一定の秩序と配列、矛盾のない構造世界を持っています。統一された一つの構造的世界、それが「木の世界」です。木はシステムを最高峰とし、システム表現が作品の中心です。私は木の作品を「木的構造主義の作品」と言っています。配列的で実に無味乾燥です。しかし構造美の組み合わせは時折り美しいく、重なり合うと別な構造に見えてきます。単純な構造が多重に重複し、重なり合い別な構造を生み出することもあります。重層に折り重なって連結した構造で作られています。この概念は日本の華道に似ているかもしれません。日本の伝統的な華道や茶道の概念は木の構造からシステムを取り入れているのです。日本の華道、茶道はインスタレーション性の強い芸術なのです。華道は「陽の木」の構造を持つた陽の芸術で外交的です。茶道は「陰の木」の構造を持つた陰の芸術で精神的です。陰と陽に分かれているこの二つの日本の伝統アートは木の構造である「木のフラクタル」を巧みに取り入れて生まれたものです。瞬間的で即時的で「時間」うまく構造に生かしている構造的芸術なのです。「場」「間」「空間」「時」を構造的にとらえ、陽の「華道」は心の外部へ「外の心と空間へ」、反対に陰の「茶道」はより内部へ「内なる心へ」と構造をつき進むんで行く芸術です。華は外へ、茶は内へと、両アートの意味は「木の構造」を巧みにシュミレートしらが構造的展開をしています。私のインスタレーションも陰陽の木の構造をモデルに「木のアルゴリズム」を使って制作したものです。陰の木構造、陽の木の構造を柱に構築したものです。土の作品、金の作品との関連で見ればその意味ははっきりしてきます。

水の作品の意味、水は「音の無い世界、闇、陰の宇宙、深海の闇、沈黙の水世界」です

。水の分子の連結は、恐ろしく深い海底のイメージです。水は長く連列した構造を持ち、。湖の水のように、川の水のように、海の水のように連結した巨大な構造の世界が水の作品概念です。巨大な連結した水の構造、これが水の作品コンセプトです。しかしその構造は一定しています。すべての水構造はつながった安定構造です。よい循環だとスムーズに結合している単純な構造なのです。絶対に複雑化しない構造美が水です。重なり合うことのない構造の美しいさ、「水のビデオとインсталレーション」の作品達は純粹で単純、シンプルでプリミティブ、そして単体でも連体でも全体でとらえても同一の構造を生み続げる作品達です。極小（ミクロコスモス）と極大（コスモス）とは等しい構造のように、また一滴の水と大河の水は等しいように、水の作品達は同一に連結した系列の作品なのです。インсталレーションも同様に水の構造を取り入れ、水のアルゴリズムを取り入れて制作したものです。

火の作品の意味、火の構造は不定形です。燃焼する火の構造は燃える直前の構造、燃え始めの構造、燃え盛る構造、そして燃え終わる構造に分かれます。この3つの構造はいずれも燃焼のための熱量のエネルギーです。モノが燃えるために出るエネルギーの構造は変化にみち、燃えるための構造はつねに不定形です。定まった形（構造）はありません。しかし力のある不定形な構造であることはたしかです。炎は人間の心を引け、動物の心も同時にひきつけます。構造化しながら構造化できない、次ぎから次ぎへと燃焼しては崩れ、消えて生まれていく構造、炎が燃える勢いは構造的に見えますが、定まらない構造なのです。それは炎の表面である「炎の形」を見ればあきらかです。メラメラと燃える炎の形態は見れば見るほど心理にせまつてきます。水的に言えば「波」の構造に良く似ています。この熱を発し、モノを焼き、形態や形を変える火の構造は本来人間が原始的に持っている構造かも知れません。それは脳の構造に似た、浮かんでは、消えて、思い出し、また消える、うつろな回路、人の記憶回路に似たアナロク的な構造かもしません。心臓の規則的な運動の構造では表現できない、心のユレに似た構造かも知れないのです。生まれる以前の魂の構造のように輪郭のない構造かも知れません。とにかく構造的ではなく直観で作った作品です。創造力のすべては直観とは言いませんが激しい脳の燃焼はインスピレーションです。瞬間のひらめき、火の作品は直観と一瞬のひらめき、瞬間の燃焼で作ったものです。火は「木、金、石」と対比したり、「金、土、木」と組み合わせて見ると火の意味が見えてくるように制作しております。「水と金」「水と木」「水と火」などの組み合わせで意味を発見するのも全体の構造が見えてくるヒントです。以上が私の作品に対する姿勢でした。今回のインсталレーションは木がテーマの作品です。木の生成のアルゴリズムから観た世界であり、木の構造からヒントをえて制作したものです。私の作品を系列的に見ている人は前の作品と対比して見るので意味が構築出来るでしょう、始めての人は「部分と全体」、木の構造と自分の心の構造の対比を見て下さい。木は人間の心の構造とそっくりなのです。